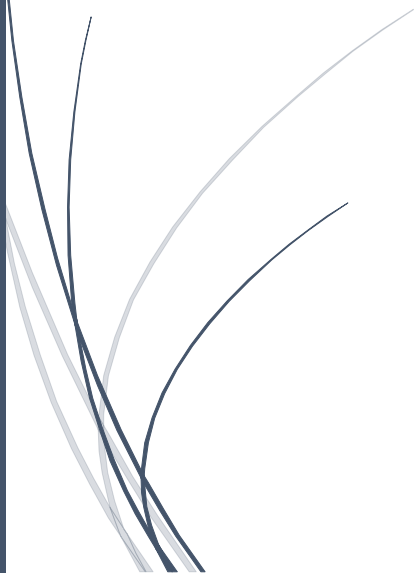


# M 属性、開発中

～S な彼氏はベターハーフ～ 3～



あの後、滝上さんは家まで送ってくれて、人目がないのを確かめてこっそりキスをして別れた。

そこまで優しくしてもらったけれど、ひどくみっともないところを見せたからもう連絡は来なくなるかもしれないと、実は内心ビクビクしていた。

あの時はああして優しく慰めてくれたけれど、たくさん泣いて落ち込んでいた私がかわいそうだったからじゃないのかと。

けれど、違った。

むしろそれからは、それまで以上に頻繁にメッセージも電話もくれたし、次のセック

スではびっくりするくらい甘やかしてくれて、いつものSっぷりがまったく影を潜めていた。といつても、それも2回だけで、3回目からはまたSの滝上さんに戻ったけれど。

でも、それで。

私はそれまで以上に滝上さんが好きになったし、強く信頼できるようになった。

あんなところを見せても引かないどころか、大事にしてくれて、態度が変わらなかつた。私を大切にしてくれてると実感できる。

滝上さんとのセックスは確かにちょっと刺激が強いけれど、この間みたいなのはもう嫌だと思う反面、滝上さんがしたくて、それまでと変わらず私に接してくれるなら、してもいいと思ってる自分がいることに驚いた。

むしろ、してほしいかも……。

私も相当、いっちゃってる。

私は、普通の滝上さんも、セックスになるとスイッチが入ってDになる滝上さんも、好き。

最初は普段とセックスの時で別人のように思えたけれど、私の中で、ふたつの滝上さ

んがつながりつつあった。

## 中略

残されたのは、私と滝上さんだけだ。

二人きりになると、滝上さんが身をかがめて額に、頬にキスをくれた。柔らかい感覚に胸がいっぱいになる。私もキスを返したいけれど、動けなくてただ滝上さんを見上げ

た。

滝上さんは指を伸ばすと、私の体を縛る縄を辿る。胸、腕、脚。縄越しだからあまり感覚はないけれど、滝上さんが縛られた私の体を楽しむように、そして慈しむように見ているのが、うれしかった。

「見てごらん、咲良」

やがて、滝上さんはそう言って正面の鑑を目で示す。滝上さんに言われるままに視線を向けると、全身を縛られて大きく足を開き、頬を紅潮させた私がそこにいた。

「……っ」

熱い吐息が漏れる。

「この姿を、ルナさんにも見せたんだ。今日初めて会った人なのに。なのに、こんなに濡らして」

言いながら、滝上さんの手が伸びて私の股間からあふれる蜜を掬った。一瞬だけ触れた指先が、ほてったそこには冷たく感じて小さく体が震える。滝上さんの手とそこが、細い糸でつながって、そんなのまで全部見えてしまったまらなくなる。

「いやらしくてかわいい咲良。縛られて、どう感じてる？」

濡れたままの指を口元に差し出され、反射的に舌を伸ばして滝上さんの手をきれいに

するように舐めた。自分の味を確かめ、私はチュッと指先を吸って離す。

「……興奮してます……」

「それだけ？」

なぜ、敬語になっちゃうんだろう。

「……縛られて、うれしい、です」

「ちゃんと言っていい子だ」

滝上さんの指が、また私の蜜口に触れる。今度はあふれる蜜を粘膜全体に塗り広げるように周囲をなぞられ、思わず口から「あああ……」という嬉しそうな声が漏れた。そ



の声に自分で驚く。

私、こんな声出すんだ……。

「気持ちよさそうだな」

「はい、気持ちいいです……っ」

言いながら、うっすらと涙がにじむ。気持ちよくて、満たされている感覚があつて。

そんな私を滝上さんは満足そうに見下ろし、今度は指の背で蜜口からクリトリスまでをなぞった。慣れない、その少し骨ばった感覚に反射的に背が浮く。クリトリスの周辺に蜜をまぶすように大きく撫でられ、腰が動いてしまう。

「あああ……っ！」

ぬるぬるしたものでクリトリスをなぞられると、気持ちいい。でもいつもの、指の腹やペニスの感覚じゃない。気持ちいいのに、もどかしい。

なに、これ。

は、は、と一気に荒くなった呼吸のまま、私は滝上さんを見上げた。

「咲良は感じやすく、敏感で、虐め甲斐がある」

そして、また指の背でクリトリスを撫でた。

「ああん……っ」

切ない声が漏れて、腰が動く。どろりと蜜があふれてお尻の方に伝うのがわかった。

「こんなにごぼして」

滝上さんが楽しそうに言って、垂れた蜜を指先に掬う。そしてそれを乳首に塗り込めるようにして触れてきた。

「……んっ」

ぬめる液体越しに乳首を触られる感覚に、上半身がくねる。摘まむのではなく、ぬめりを借りて転がすような愛撫がたまらなく気持ちよくて、「そ、それっ、気持ちいいですっ」と叫ぶように言うと、「ほんとうにいやらしい体だ」と滝上さんはとても楽しそうに

眩ぎ、もう一度蜜を掬うと反対側にも同じ愛撫をくれた。

「あ、ああ……っ、あ、いい、それ、いいです……っ」

両方の胸を自分の蜜でべたべたにしながら正直に感覚を伝える。ビンビンに尖った乳首を手のひらで大きく転がされると、それだけで腰から電流が走ったように感じてしまいい、高い声が止まらなかった。

なんで、なんで胸だけでこんなに気持ちいいの……っ？

滝上さんは何度も蜜を追加して胸を優しく虐め、私は不自由な姿勢で胸を差し出すようにして突き出しながら、滝上さんがくれる愛撫に声が止まらない。けれどそうしなが